

フライフィッシング用のロッド、リール、ロッドケース。すべてカゲロウロッド製のオリジナル



漆を塗って乾かす。この作業を繰り返す



Hideto Ishida

フライフィッシング・ロッド作り
こだわりの職人

信念をつらぬく

日野町中菅の石田秀登さんは、フライフィッシング・ロッド作りの職人（店名「カゲロウロッド」）。北海道から九州の釣り人から注文を受け、予約で1年待ちというところです。

趣味のフライフィッシングがきっかけで始めたロッド作り。3本、4本と作るうちに「これを仕事にしたい」と思い、19年間勤めていた仕事を辞めて職人の道に進みました。

プロになって10年。ロッドに刻まれた通し番号は、現在366番を数えます。

ロッドの素材は、中国産の竹。5年程乾燥させてから焼き、断面を3角形に削り、合わせて6角形にします。1本の竹から3本分のロッドがとれ、作業効率を考えると1度に10本程度作っていきます。

石田さんのロッドは、仕上げに漆（うるし）を重ね塗りするのが特徴で、できあがったロッドは輝きを放ちます。

ロッドのほかグリップや金

属部品（ガイド等）も手作り、ロッドケースの皮も自分で編んでいきます。

石田さんは、「1本1本心を込めて作っています。その気持ちから変わらませぬ。厳しい職人の世界で生き残っていくには、常に良い物を作り、技術を向上させていかなければならない」と話します。

釣り人が違えば竿の好みも違う。ノートには、寸法、調子（アクション）など詳細に書かれています。すべてが世界で1本しかないロッドです。

抱負を聞くと、石田さんは「生涯で1000本作ればいいでしょう」と話します。地元の日野川について聞くと、「中国地方の釣り人から好評で、自慢できるふるさとの川です。勇ましい魚の顔つきは最高」と話します。自身も竿を振りに川へ出かけることもあり、「魚がライズ（水面に浮かび上がる）した瞬間、熱くなる」と釣りの魅力を話します。

と釣りの魅力を話します。



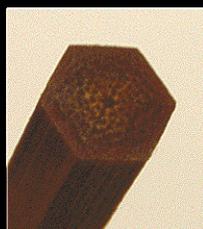
カゲロウ
Kagerow
カゲロウ ロッド

（上）フライ（毛針）も手作り。どれを選ぶかが勝負
（左）日野川で釣った勇ましい姿の尺ヤマメ



竹を台座にのせ、注文どおりの調子に削る

1本1本に通し番号とサインが刻まれている



(左)断面は六角形。正三角形を合わせる

(下)材料は中国産の竹を使う。4年から5年、天井につるして乾燥させてから使う



ロッドの仕上がり具合を見る石田秀登さん。妥協はっさい許さない